飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

特別展示「飛鳥寺」　昭和30年，当研究所は，初めて飛鳥の地で，飛鳥寺の発掘に着手した。その後中断があったものの，以来20次以上にわたる調査は，古代史研究に画期的な成果をもたらしている。その成果を観覧者が一目で理解できるように展示してみた。会場に入ると，正面に発掘遺構模型（縮尺50分の１）を置き，その上にアクリル樹脂製の仏殿及び回廊を建てた。

300ｍ四方の寺域の中に塔の北，東，西に金堂を配した最古の伽藍配置を見せ，現在の安居院本堂の位置を理解しやすいようにした。模型につづいて，塔心礎の発掘状態を再現してみた。これは，実大の塔心礎模型を作り，舎利孔の周囲に挂甲，馬鈴，蛇行状鉄器や金銅製荘厳具などを置くと，これまで，写真や実測図でしか知られていなかった状況がよく理解でき，一般の入館者はもちろん研究者にも大好評であった。

埋納物の中で最も注目されてきた挂甲は，ここ数年来復原を試みてきたが，やっと完成し，人形に着装してみた。この挂甲は甲冑史のなかで，古墳時代と歴史時代をつなぐ資料であり，その復原は高く評価された。

この展示で最も話題を集めたのは第２展示室を使った飛鳥大仏の再現イメージである。如来像を金色の実大パネルにし，前には朱柱を立て堂内の雰囲気を作ってみた。なお「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」（重文）や，近世の安居院の様子を記した井村家文書なども展示した。

特別展示「飛鳥の石造物」　当館では，展示方法を万葉集，宮殿，寺院，古墳，石造物の分野別に展示している。毎年，入館者へのアンケートの回答では，古墳，石造物への関心が非常に高い。多くの要望に答えた石造物の展示を試みた。全体の構成を館内と館外の前庭とし，館内では，近世文人達の石との出会いを陳列し，また，亀石については川原寺の結界石とする東寺文書を並べた。また，益田岩船文書の空海碑文台石説を示す「大和州益田池碑銘并序」（国宝）など石との関連資料を展示した。第２展示室は，元禄15年猿石が掘出された後，梅山塚（欽明陵）に並べられた状態をレプリカを使って復原した。また，前庭では，岡と出水の酒船石を車石で連結し，水を流した。また，須弥山の下段の四方にあけられた小孔から水を出し，斉明年間の饗宴の飾り物を再現した。前庭部の水の仕掛けについては多くの関心が集った。　（猪熊兼勝）

猿石再現イメージ